

# 哲学カフェ企画運営から大学生が得た学びの検討

## ——立場や考え方の異なる他者との対話実践——

A Study of What University Students Have Learned from Organizing Philosophy Cafés:  
Dialogues with the Others Who Have Different Views and Positions

稲原 美苗（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）  
三井 規裕（鳥取大学教育支援・国際交流推進機構）

### 1 はじめに

本稿では、神戸大学で実施されているグローバル・スタディーズ・プログラム（以下、GSP）国内フィールド研修「哲学カフェの企画運営プログラム（2021年度）」<sup>(1)</sup>の実践についてまとめ、哲学カフェを経験し、自ら企画・運営を実践した学生がそこからどのような学びを得たかについて報告する。

本プログラムは、2019年度より国際人間科学部生を対象に開講されている。2019年度は、稲原が所属している研究科の子育て支援を中心としたサテライト施設においてプログラムを実施した<sup>(2)</sup>。そこでは、哲学カフェの企画運営、東日本大震災や福島第一原子力発電所の事故で被災した福島県南相馬市を訪問し、現地で開催されている哲学カフェに参加してきた。これらに参加することで、様々な問題と直面してきた人々と一緒に考えることを主軸にしてきた。具体的には、GSPの学生が対話の場を主体的に企画運営し、どのような問いが参加者にとって考える端緒となるのか、対話に広がりや深みを持たせられるのかを考えられるように工夫した。

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、本プログラムを実施できなかったが、2021年度から稲原に加え、三井が「哲学カフェの企画運営プログラム」の運営に携わることになった。著者らは、コロナ禍においてどのような対話の場を提供できるのかを考え、2020年11月からオンライン上で定期的に「HC Café ～哲学対話の部屋～」と名付けた哲学カフェの実践を開始した。こうした実践を続けながら、オンライン上で参加者が対話を相互に促進し合えるような仕掛けを考えながら、GSPのプログラムとして学生たちを誘い入れる準備を始めた。オンラインでの哲学カフェの参加者層は幅広く、異世代間、異業種間交流、異性間、異地域間の人々が集まってきた。

2021年度GSPの「哲学カフェの企画運営プログラム」は次の通り進められた。まず、学生がオンラインで実施された「HC Café ～哲学対話の部屋～」に1度参加し、哲学カフェについて体験的に学ぶようにした。次に、学んだことを参考にしながら、自分たちで哲学カフェを企画し、参加者の募集から当日の運営まで一連の流れを実践する形にした。

### 2 「哲学カフェの企画運営プログラム」の概要

「哲学カフェの企画運営プログラム」は、普段の大学教育の場とは異なり、知識の伝達や合意形成の場を提供するのではない。その目的は、1つのテーマについて皆で話し、聞

き、考えるという対話のプロセスを重要視することにある。哲学カフェの参加者は対話しながら、副効用的に1つのテーマについて多種多様な意見や論点、語り方があることを認識する。そして、立場や考え方の異なる他者とのコミュニケーションや共同の探求のために必要な態度を学ぶことも、本プログラムにおいて大切にしてきた点である。多角的な視点を持つこととは、異なる他者と理解し合うためには、何をどのように考えれば良いのかという「答えのない問い」に対して真剣に向き合える態度を習得することだと考えられる。

哲学カフェでは、自分の経験に即して話すことが重視される。過去にこのプログラムに参加した学生の中には、自分自身の意見を話せず、講義や本で見聞きした知識から話す人も数人いた。そのような場合には、見聞きした内容を話した理由について尋ねられても答えられないことが多く、自分の発言を全く理解していないことになる。哲学カフェは学生たちが、自分の発言の中で表現した意味を自覚し、自分自身の立場や考え方を引き受ける態度を習得する機会になり得る。つまり、本プログラムは、学生をグローバルな視野（地球規模の視野で考え、地域視点で行動する）を持つ市民として育てる側面もあると言える。

哲学カフェが市民性教育としての意義を持つために、必ずしもテーマが政治的である必要はない<sup>(3)</sup>。そして、テーマ設定の動機が政治的であるからといって、必ずしも対話の内容が政治的になるわけではない。例えば、2021年11月20日に取り上げられた「安全・安心とは何か？」というテーマはコロナ禍の関心から提案された。しかしながら、実際の対話では、安全とは、客観的な数値で測れることが多い、安心は、主観的で心的な要素があるなど、最初から抽象的な話になった。その後、「安全であるから安心できるのか」、「安心であるから安全なのか」という問いに発展した。政治的な関心から設定されたテーマであっても、対話中に参加者の個人的な経験に基づく語りから新たな問いが出され、それらが新たな見解をもたらしてくれる。つまり、哲学カフェの市民性教育としての意義は、テーマではなく、前述したように立場や考え方の異なる人々（異なる他者）と対等に語り合うという営みにあると考えられる。身近にいる同質性の高い人々（家族、友人、当事者同士）との会話とは異なり、学生にとって哲学カフェという場で一期一会的に出会う人々と共に対話することは、社会問題への関心を高め、他者の意見に流されない自分の判断力を習得することにつながる。

### 3 プログラムに参加した学生へのグループインタビュー

本プログラムをオンラインで実施するに際して2021年4月に参加者を募ったところ、学部生4名からの登録があった。また、自主的に参加したいという申し出があり、大学院生1名、学部生3名（過去に哲学カフェを進行した経験のある1名を含む）が参加することとなり、合計8名で実施することとなった。8名の学生が関わった「HC Café ～哲学対話の部屋～」のリストを表1に示した。なお、各回のテーマは、学生たちが興味・関心を出し合って、意見交換しながら問いと案内文を設定した。

このプログラムから学生が何を学んだかを検討するにあたって、プログラム終了後、参加学生に対し、グループインタビュー調査の協力依頼を行った。調査は、依頼内容に同意した4名を対象に、2021年7月31日にオンライン会議システムを利用して実施した。調査方法は、グループインタビュー形式とした。具体的には、調査者が事前に2つの質問を

準備し、対話しながら答えてもらった。1) 哲学カフェを経験した感想、2) 異なる他者との対話で感じたことについて質問した。参加学生の回答内容に応じて、その場で気になったことに対して詳しく尋ね、できるだけ参加学生が自由に話せるように心掛けた。本調査の依頼を行うにあたり、事前に、神戸大学大学院人間発達環境学研究科における人を直接の対象とする研究に関する研究倫理審査委員会の審査を経て、神戸大学大学院人間発達環境学研究科長より承認（受付番号 503-2）を得て実施した。

表 1 学生が参加・主催した哲学カフェ

実施日	テーマ	案内文	学生の関わり
2021年5月8日	異文化に触れるとはどういうことか？	グローバル社会の中で自分と異なる文化に触れる機会が増えていますが、近年のコロナ禍でその機会が激減しています。今一度、ご自身の経験を振り返り、異文化に触れるとはどのようなことなのか、一緒に考えてみませんか。	企画
2021年6月26日	あなたにとっての伝統文化とは？	あなたは「日本の文化」について外国人に語る時、どんなことを話しますか？着物、庭園、折り紙、和菓子等さまざまでしょうが、そこでのストーリーには、時代や世代を超えた「伝統」があり、どこか「日本らしさ」があるのだと思いませんか。一方で、多くの人にとって身近でもない「伝統文化」は担い手の不足や市場の激しい競争のもと危機にも立たされています。だからこそ今一度「日本の伝統文化」について対話しませんか。	企画、進行、運営
2021年7月17日	幸せの定義とは？	「幸福度No.1の国ブータン」という言葉は聞いたことがある人も多いのではないのでしょうか。ブータンはGNP（国内総生産）が低いにもかかわらずGNH（国民総幸福量）が高い国と知られています。それに対して日本は世界的に裕福な国であるにも関わらずGNHが低い結果となっています。それでは人によって幸せとはどのようなものなのでしょうか。人によって幸せという基準が異なる今、「幸せ」について話してみませんか？	企画、運営
2021年7月31日	あなたにとって働くとは？	大学卒業後の将来のイメージはありますか？新卒入社以外の選択肢もあると言われながら、「人と違う」ことをするリスクや受け入れられなさを感じるというこの時代。「働く」ということに対してあなたが持っているその価値観を共有し、みんなで一緒に勇気を持って疑ってみませんか？	企画、進行、運営

#### 4 プログラムに参加した学生インタビュー結果

ここでは、グループインタビューの結果について述べる。なお、学生の発言内容を補足するため（）内に筆者らによる説明を加えた。まず、哲学カフェを経験したことについて、学生は以下のように述べていた。

学生 A: 「今まで自分と似たような人としか関わってこなくて、視野っていうのがそれに固定されちゃってたんですけど。こういう場で年代といたしまざまな価値観を持った人たちとのお話を聞けて、[中略] これからの生き方についてもうちちょっと考えたいなっていうふうになったので」

学生 B: 「(問題解決のための) 目的がある場合はよくあったけど、哲学カフェっていうの、もうそれぞれがそれぞれの、もやもやしてたとしても、それに向き合うっていう時間を、すごく本当の意味で立ち止まれる時間ってそういうことじゃないと多分、作れない」

学生 C: 「すごく身近な話題だったり素朴な話題を、率直に話せたっていうのが大学のできる経験とは、全然違ったなと思っていて。特に大学って結構、結論を言わなきゃいけないとか、ちゃんとまとまった意見言わなきゃいけないっていうプレッシャーが結構大きかったんですけど。そういうプレッシャーがなかったの、すごく思ったことをそのまま自由に話せたなって...」

学生 D: 「普段そんな友達とかと働くとは何、とか幸せとは何ってあんまり2時間も、語ったりしないと思うんですけど。(中略) だいぶ自分の考えみたいなのも、深くなったと思うし。(中略) すごい良かったんじゃないかなと思う反面。私もちょっとその問題解決しようぜみたいなのところがあるので、難しいですね。もやもやして終わってしまうみたいなのところはちょっとありましたって感じです。」

学生にとって哲学カフェへの参加は、異なる他者との関わりの中で、自分の考えを対峙させ、捉え直す時間だったと考えられる。例えば、学生 A は、異年代の意見を聞いたことで、「似たような人としか関わってこなくて、視野っていうのがそれに固定されちゃってた」と言い、「生き方についてもうちちょっと考えたい」と述べていた。また、学生 B は、問いについて考え、聞き、話すことで「それに向き合うっていう時間を、すごく本当の意味で立ち止まれる時間」として哲学カフェの場を咀嚼していた。さらに、学生 C は大学教育と比較し「大学って結構、結論を言わなきゃいけないとか、ちゃんとまとまった意見言わなきゃいけないっていうプレッシャー」があると語り、哲学カフェでは「思ったことをそのまま自由に話せた」と述べていた。一方、学生 D は「すごい良かったんじゃないかなと思う反面。私もちょっとその問題解決しようぜみたいなのところがあるので」と語り、「もやもやして終わってしまう」場として哲学カフェを捉えていた。つまり、学生は哲学カフェに参加したことで、自分の視野を広げる機会となり、大学の授業のように他者を納得させる発言を意識しなくても良いと考えていたと言える。また、良い場であると認識しながらも、問いの解決に至らないことに対する割り切ることのできない心境を抱えていたと思われる。こうした点について稲原美苗ら(2021:45-6)は、哲学対話には「他者の語りを聞き、考え、『私』の経験(もしくは、知)と対峙させ、繰り返し意味を更新していく」力を育むことができる」と指摘している(4)。したがって、学生は哲学カフェで「これまでの私」と「今ここにいる私」を交差させ、他者の語りを聞き、立ち止まって考えるという営みを行っていたと思われる。

次に、異世代間での対話で感じたことについて、以下のように述べていた。

学生 B: 「しょうがないことだとは思うんですけど。学生だと、その話の流れに沿って、しゃべろうとか。まとまった意見をしゃべろうっていう意識って、持ってる人が多いと思うんですけど。そうじゃない学生以外のかたがたって結構、今の話と全然違うよねみたいな話だったり。前回いらっしやったかたみたいに、話の流れを壊してしまうような質問とかをして、雰囲気、悪くなりかけたりとか。そういう発言される方もいるので、それがいろんな人、いるなって思えるから、そういう意味ではいいのかもしれないですけど。最低限の対話のルールというか、そういうものを守れないとか、そういう方がいるのは、ちょっとやりづらい面もあるのかなとは思いました。」

学生 A:「今回の結構、先生の紹介（知り合いのこと）とか多かったわけじゃないですか。なので、先生だったり、しっかりした人が多めで、大人と学生っていった構図みたいなんが、勝手に自分自身の中であって、萎縮しちゃったっていうのが、ちょっとあります。」

学生 D:「良かった、悪かったでいうと、良かった面のほうが大きいかなと思っていて。それは私自身がいろいろな人としゃべるのが好き、しゃべったりとか考え聞くのが好きなので、そういった意味では良かったんじゃないかなとは思っている。一部、話の流れを変な方向にとか、あとは、自分の意見はずっと2時間変わらないまま、変に流れを持っていこうとするような人も聞きながらいるなって思ったんですけど。そういう人は取りあえずそういう人ということ。」

学生は、場の雰囲気が悪くなることや意見を変えない他者に対して、やりづらさを感じていた。例えば、学生 A は「大人と学生っていった構図みたいなんが、勝手に自分自身の中であって、萎縮」してしまったと述べていた。また、学生 B は「学生だと、その話の流れに沿って、しゃべろう」とするが、学生以外の参加者は「話の流れを壊してしまうような質問とかをして、雰囲気、悪くなりかけ」たと感じていた。さらに学生 D は、「自分の意見はずっと2時間変わらないまま、変に流れを持っていこうとするような人」がいたと述べていた。つまり、学生は対話の場は平等であるという前提を認識しているにもかかわらず、無意識的に「大人／学生」という構図を作ってしまう、参加することに気おくれしていた。こうした構図は、自分たちと同じ集団に属する人には親近感を、属しない人には警戒心を抱くアンコンシャス・バイアスが影響していると思われる。また、自分の意見を変えない参加者や場の雰囲気が思わぬ方に変わることにに対して抵抗感を感じていた可能性がある。これらのことから、学生は異世代の人々との対話にやりづらさを抱えていたと考えられる。

## 5 まとめ

本稿では、哲学カフェを経験し、自ら企画・運営を実践した学生がそこからどのような学びを得たかについて述べた。インタビューから明らかになったのは、対話実践を通して、学生が多様な視点を持つことの必要性を認識し、自らと向き合うことを経験できたことだった。つまり、学生は「これまで（過去）の私」と「今ここにいる（現在の）私」、さらに、「これから（未来）の私」を交差させながら、異世代間対話の難しさを感じ、どのように対話すれば良いかについて考えていた。立場や考え方の違いを目の当たりにし、問いに向き合うことと自分の言葉で語ることの必要性とその困難さを、経験的に学んでいた。学生がこのプログラムを通して学んだのは、社会人として生きることにつながるのではないだろうか。臨床哲学の創始者である鷲田清一（2010:18-9）は次のように述べている。

生きてゆくうえで本当に大事なことには、たいてい答えがない。たとえば<わたし>とはどれかということ、ひとを翻弄する愛と憎しみの理由、そして生きることの意味。これらの問いは、答えではなくて、問うことそれじたいのうちに問いの意味のほとんどがある、これらの問いとは一生、ああでもないこうでもない格闘するしかない。問いつづけることが答え

ることだと言ってもいいぐらいだ<sup>(5)</sup>。

つまり、学生は異なる他者と対話をすることで、これまでの同質の横のつながりを再認識し、将来的に遭遇する異質の縦のつながりに違和感を抱いた。グループインタビューの中で、お互いに内省し合い、問い続ける市民として自覚し始めたのではないだろうか。

最後に、今後の課題について述べる。対象となった実践は1大学の限られた学生を対象としたプログラムであった。そのため、ここで述べた学生の意見は1つの事例でしかない。筆者らはこうした実践が教育を含む様々な場に取り入れられるべきであると考えている。そのためには、今後もこのような対話実践を継続し、学生の参加状況の観察や丁寧な聞き取りを行い、事例を積み重ねていくことが求められる。

### 【註】

- (1) グローバル・スタディーズ・プログラム (GSP) とは、実体験を通してグローバル 이슈について学ぶことを目的とし、神戸大学国際人間科学部生全員が海外研修やフィールド学修に参加する実践型教育プログラムのことである。本プログラムを必ず受講し海外での留学経験を積むことが、本学部での卒業要件になっている。GSP は事前学修、GS コース、事後学修の3つで構成されている。事前学修ではグローバルな課題に関して現状とその解決策を専門的な見地を学び、学生が自ら取り組む具体的な課題を設定する。GSP では、学生一人一人の希望や予算にあった留学を実現するため、GS コースという3つのコースを用意している。1つ目は、海外スタディツアーや海外インターンシップを通して、国内で学修した専門知識を海外の現場で応用し、地域の人々と協働しながら実践的に課題に取り組む「実践型 GS コース」、2つ目は、海外での語学研修などに参加することによって国際的な視野と語学力を獲得するとともに、日本国内でのフィールド学修を行い、比較文化的・多元的な視点から課題に取り組む「研修型 GS コース」、3つ目は、中長期に亘り海外に滞在し、専門知識を習得するとともに、現地でのフィールド学修を行う「留学型 GS コース」がある。本プログラムは2つ目の「研修型 GS コース」に位置付けられる。( <http://www.fgh.kobe-u.ac.jp/ja/node/45> 2021年11月21日閲覧)
- (2) 稲原美苗・藤原雪・山川哲 (2020) 「大学院生が企画運営する哲学カフェの社会教育学的実践～地域コミュニティでの対話の場作り～」『思考と対話』 vol.2, pp.88-94. (神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設である「のびやかスペースあーち」での対話実践について報告している。)
- (3) 坂口緑 (2006) 「市民性の育成と生涯学習」『生涯学習研究 e 事典』(日本生涯教育学会) で生涯学習での市民性について次のように定義されている。「1990年代以降、各国の教育改革のなかで注目を集めているのが生涯学習の『市民性 citizenship』を育成するという側面である。『市民性』とは次の二つの意味がある。ひとつは、「大人」として客観的な判断力を身につけ精神的に成熟するという側面、もうひとつは社会の成員としての権利と義務を行使するという側面である。」( <http://ejiten.javea.or.jp/contentee00.html> 2021年11月23日閲覧)
- (4) 稲原美苗・中川雅道・津田英二 (2021) 「大学院生のための学際的探求コミュニティの創生と対話実践」『思考と対話』 vol.3, pp.41-47.
- (5) 鷲田清一 (2010) 『わかりやすいは、わかりにくい? -臨床哲学講座』、ちくま新書。

本報告は 2019 年度採択科研費基盤研究(B)「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察（19H01185）」（研究代表者：稲原美苗）による成果の一部である。